# 中國共産黨第二回大會について

## ——黨史上の史實は如何に記述されてきたか

石川禎浩

一　大會關連文書の生成と傳存
二　大會の會期、場所——定說への道のり
三　中共二大の代表名簿

一九二一年に第一回の全國代表大會を開いた中國共産黨は、その翌年七月に上海で第二回大會を開催した。兩大會を比較すると、第一回大會が由來のはっきりした正式文書を殘しておらず、「創立」「誕生」「出發」といった多分に象徵的意義において注目を浴びてきたのに對して、第二回大會は、黨規約や決議案といった大會關連公式文書が傳存し、それが當時の共産黨の活動方針を確かに傳えているという點で、實際的な黨の活動開始を表示した大會であると言ってもよいだろう。黨の幹部にして黨史著述の先驅者でもある蔡和森が、第一回大會當時の中國共産黨を指して、「せいぜいが宣傳機關であって、政黨とは呼べないもの」と述べ、第二回大會をもって「政策的な決議」を有する「政黨」になったと評するのは、兩大會の違いを端的に表現したものである。(1)

また、第二回大會は、その大會關連文書も個々の問題にそった九個の決議案と、組織像を明確に示す黨規約（中國共産黨章程）、そして內容豐富な大會アピール（「中國共産黨第二次全國大會宣言」）といった整合的な構成を持ち、いずれも中國

においては、極めて高く評價されている。とりわけ、中國共產黨（以下、適宜「中共」と略稱）の究極的目標を掲げる一方で、當面の方針を「民主的連合戰線」の構築による反帝、反軍閥運動と定めたことは、のちの國共合作へ向けて道筋をつけたことを意味しており、第二回大會の位置は、單に中共黨史上だけでなく、中國現代史上においても重要である。その意味では、中國の黨史研究者がこの大會を、最低綱領と最高綱領の辯證法的統一を示したものと、ほぼ手放しで評價する[2]のも故なきことではない。

しかしながら、こうした成果を生みだした中國共產黨第二回大會（以下、適宜「中共二大」、あるいは單に「二大」と略稱）の會議の實際、すなわち何時、どこで、何人のどのような代表によってこの大會が開催されたのか、という基本的史實はなおはっきりとした解決を見てはいない。それどころか、そもそも大會關連の公式文書として傳存する諸文獻自體も、はたして如何なる生成過程を經て公式文書となり、どのように流布してきたのか、不明な部分が多いのである。十二人と言われる大會代表の顏ぶれに至っては、實は中共の公式見解自體が、後述するように、この十年の閒にかなり樣變わりしている。なぜこのようなことが起こるのか。

また、中共二大の八十周年にあたる二〇〇二年には、かなりの學術刊行物に中共二大關連の論文が掲載された。例えば、地元上海では、中共一大會址紀念館の刊行物である『上海革命史資料與研究』が、第二輯で中共二大の特集を組み、二十四篇の關連論文を掲載したが、大會自體の史實を檢討する歷史學論文はわずかに一篇であった[3]。實は、中國において二大代表の考證を行った公刊論文は、信じがたいことに、これを含めて二篇しかない。いま一篇は、改革・開放路線によって、ようやく中共黨史の學術的研究が始まったばかりの一九八一年の論文である[4]。史實の解明のレベルでいえば、同じカテゴリーに屬するはずの中共の第一回大會（以下、「一大」と略稱）にかんする考證が、大小含めて二百篇を越えるのを考え合わせれば、この格差は尋常ではない[5]。いわば、中共一大がその象徵性ゆえに明らかに過大な注目を浴びてきたのに對して、中共二大はその陰に置かれ續けたのである。

本稿が解明せんとするものは、前もって言えば、中共二大の代表の正しい顔ぶれではない。そうではなく、さしたる考證も公表されることなく――つまり手續き不明なまま――名簿のみが變わっていくというような中共初期大會の記述が如何になされてきたか、である。何らかの特殊な資料に基づいているような印象を與える現在の中共の公式見解がどのように組み立てられてきたのか、そして煎じ詰めれば、中共にとって自黨の歴史とは如何に書かれるのかを、中共二大を題材に檢討することである。その意味では、この作業は、單に初期黨大會にかんする回想や文書の信憑性を疑うという點にのみ歸着するのではなく、むしろそれを通じて、中共黨史研究に特有な歴史像自體を越えんとする試みである。

## 一　大會關連文書の生成と傳存

中共二大に關連する公式文獻としては、大會のひと月ほど前に發表された「中國共產黨の時局に對する主張」、大會で採擇された規約（中國共產黨章程）と九つの決議案、および大會のアピールに相當する「中國共產黨第二次全國大會宣言」（以下、「二大宣言」と略稱）が確認されている。今でこそ、これら中共二大の關連文獻は、例えば『中共中央文件選集』の第一册にまとめて收錄されているように、容易に目にすることができるが、これらの文獻の作成、傳存、發掘の經緯は、實は一樣ではない。また、それら文獻の中には、作成の經緯に若干の疑問の殘るものがあるので、まずはそれら關連文書の檢討から始めることにする。それら文書の文獻學的考證は、後述する中共二大の會期や代表の考證にも密接に關わることになるであろう。

さて、上述の二大關連文書の中で、その內容が比較的早くに公表されたものは、「中國共產黨の時局に對する主張」（一九二二年六月）である。より正確に言えば、大會前後の期間に、廣く公表された文書は、實はこの「時局に對する主張」しかない。「主張」は、この年春の第一次奉直戰爭の結果、中央政界に民國再生の好機運が生じたのを受け、胡適らの著名人士が「我々の政治主張」（五月）を發表して、主に北方の知識人、政治家にかなりの反響を引き起こしたのに對して、

中共が獨自の見解を對置したものである。「時局に對する主張」の現在の通行テキストは、[6]六月一七日に發行された『中國共產黨對於時局的主張』というパンフレットに依據している。このパンフレットは相當廣範に散布されたようで、陳獨秀のコミンテルンあて報告（六月三〇日附）は、五千部を印刷、配布したと傳えている。[7]一方、刊行物への掲載としては、當時の中共の機關誌に相當する『新青年』が、七月一日發行（奥附）の九卷六號にこの「主張」を掲載していないのはいささか奇妙だが、中共系のものとしては、中國社會主義青年團の機關誌『先驅』が第九號（六月二二日）で、全文を掲載している。また、當時廣州にいた中共黨員の張太雷は、六月三〇日の施存統あて書簡で、「時局主張」を受けとったことを報告しており、[8]この文書が相當に廣く行き渡っていたことが知れるのである。

これにたいして、直接に大會にかかわる決議案などは、極めて限られた範圍でしか傳達されなかったため、それら中共二大文書が長きにわたって幻の文書となる結果を招いた。すなわち、大會でいくつかの決議案が採擇されたことは、二〇年代から四〇年代に到るまで、その間に刊行された中共黨史著作には見えるが、[9]決議案そのものは、實は中共自身もまとまった形では保管していなかったのである。[10]二大で討議、採擇された決議案などの題目（內容に非ず）が明らかにされたのは、人民共和國建國後の一九五二年のこと、[11]さらに大會で採擇された規約と九つの決議案の內容すべてが判明したのは、一九六〇年代になってからであった。すなわち、一九五九年の中國革命博物館落成を期して行われた全國的な革命資料收集運動によって、上海で中共二大の決議案――中共が二大直後に、恐らくは黨員向けに印刷した『中國共產黨第二次全國大會決議案』なる活版刷りパンフレット――が發見され、それによって一九五八年版の『中共中央文件彙編』[12]には收められていなかった決議案が、一九六五年の同書增補版で初めて收錄されたのだった。[13]現行の中共中央の公式歷史文書集である『中共中央文件選集』が收める二大の決議案、および規約は、この『中國共產黨第二次全國大會決議案』を底本としている。

このように、二大の決議案は中國において、大會後三十數年を經てようやく日の目を見たわけだが、實はそれとほぼ時

を同じくして、アメリカではマーティン・ウィルバー（C. Martin Wilbur）が、陳公博（最初期の中共黨員で、一九二二年一一月に中國を離れてアメリカに留學）の執筆にかかる修士論文「中國における共產主義運動」（コロンビア大學、一九二四年）に中共一大、二大關係の附錄文書（英譯）があることを發見、一九六〇年に詳細な注釋と解說を附して同論文を公刊した。[14] この大發見は、アメリカ、日本などの中共研究者に大きな衝擊を與えたが、こと中國にはすぐには傳わらなかった。同書の存在が中國國內で知られるようになったのは、一九七二年のことだったと言われている。[15] つまり、中共二大にかんして言えば、中國での二大文書發見とその資料集への收錄は、ウィルバーの發見とは直接のかかわりなくなされたものであると考えてよいだろう。陳公博論文に收錄されている二大關係の文獻（先の「時局に對する主張」、二大で採擇された規約と九つの決議案、そして「二大宣言」）の內容・文言を、中國國內に傳存していた文獻と比較してみると、陳論文に收められた英譯の諸文獻は、中國語版の忠實な翻譯といってよく、內容にかかわるような異同は認められない。

このほか、同じく國外に持ち出された決議案（および規約）としては、大會後にコミンテルンに送られたと推測される露語版の二大文書がモスクワのアルヒーフに殘されている。[16] そして、このコミンテルン文書を使ってなされた中共黨史の研究ノートがある。當時、コミンテルン駐在中共代表團の責任者として、モスクワに滯在していた瞿秋白が一九二九年から翌年にかけて、レーニン國際學院で行った報告「中國共產黨歷史概論」の原稿[17]である。この原稿には、中共二大で規約と九つの決議案が採擇されたこと、そして、それぞれの決議案については、その概要がメモされている。ただ、この原稿はそれ自體がその後にモスクワのアルヒーフに保管されてしまったため、その內容が流傳することはなかった。これまた陳公博論文と同樣に、瞿秋白の「中國共產黨歷史概論」も、一九八〇年代初めに發掘、公表されるまで、忘れ去られてしまったのである。

以上のことから、規約と決議案については、次のことが推測として言えるであろう。すなわち、中共は二大ののち、規約と九つの決議案をモスクワのコミンテルンに送るとともに、それら文書を收めた『中國共產黨第二次全國大會決議案』

を印刷、これを黨内の關係者に配布したが、その配布先は相當に限定されたものであった。陳公博（中共二大には出席せず）は、大會の後にそれを受け取り、渡米後にそれを英譯して自らの論文の附錄とした。一方、瞿秋白は一九二〇年代末にモスクワの文書館で露語版の二大文書を見つけ、それに基づいて「中國共產黨歷史概論」の原稿を作成した。これに對して、中國國內では、『中國共產黨第二次全國大會決議案』の配付先がかなり限定されていたこと、またこれら文書を保管すべき中共中央が、二大の後に「彈壓を受け、多くの資料が散逸して」[18]しまうような狀況にあったため、『決議案』はその後長期にわたって失われたが、人民共和國成立後の一九五〇年代末に行われた全國的な資料發掘運動によって、ようやく發見されるにいたった、と。

ところで、『中國共產黨第二次全國大會決議案』の發見は、單に決議內容の全文が明らかになる以上の意味を持った。というのは、それに收められた規約（中國共產黨章程）の第二九條には、「本章程は本黨の第二回全國代表大會（一九二二年七月一六日～二三日）の議決によって……」という字句、つまり大會の會期が明示されていたからである。中共二大の大會期日（五月か、七月か）は、後述するように、大會の開催場所（杭州の西湖か、上海か）と共に、一九五〇年代初めまで、確定的な結論の出ていない問題であった。それが、この文書の發見によって、月はおろか日の單位まで特定できることになったのだから、中共黨史關係者にとっては、まさに寶のごとき資料の出現であっただろう。

このように整理すると、中共二大の關係資料は、一度埋もれてしまった原文書の發見という構圖に見えるが、ここに一つだけ奇妙な問題が殘る。それは、黨大會の公式アピール、すなわち中共の主張を廣く社會に訴えるために作成されたはずの「二大宣言」が、大會前後に公表された形跡がまったくないことである。實は、大會後に關連文書をまとめて印刷された前述の『中國共產黨第二次全國大會決議案』には、奇妙なことに、この宣言は收錄されていなかった。そればかりか、廣く一般の新聞や雜誌はおろか、當時の中共關係の刊行物ですら、この「二大宣言」を掲載するものは皆無なのである。

「二大宣言」なるものが廣く世に知られるようになるのは、實は大會から四年近くもたった一九二六年五月のことであ

った。すなわち、それまで機關誌『嚮導』に發表された中共の對外アピールなどを編纂した公刊の資料集『中國共産黨五年來之政治主張』（一九二六年五月初版刊、以下『政治主張』と略稱）において、「二大宣言」はようやく衆人の目に觸れることになったのである。「各種の版本については、考證と選擇の上、その中の最良のものを底本とする」ことを謳う現行の『中共中央文件選集』が、二大に限って、決議案と規約はすべて前述の『中國共産黨第二次全國大會決議案』に據りながら、獨り「二大宣言」のみ『政治主張』に據っているのも、當時の刊行物に公表の形跡がないからにほかならない。さらに言えば、同じ黨大會宣言でも、第三回大會や第四回大會のものは、『嚮導』に掲載されただけでなく、それぞれ大會直後に小冊子の形にまとめられているのだから、二大のそれは、結黨して閒もないという事情を差し引いても、なお不自然さをまぬがれない。(19)

『中共中央文件選集』に收められている「二大宣言」（すなわち『政治主張』からの轉載）には、特段に祕匿せねばならない點、あるいは不自然な內容は含まれておらず、その意味では曇りのないテキストである。ただし、それが初めて掲載された『政治主張』での「二大宣言」の處理の仕方は――『中共中央文件選集』の編者は、まったくそれを問題にしていないが――甚だ不可解なものだった。それは簡單に言えば、次のようなことである。『政治主張』には、一九二六年五月一日に刊行された初版と同年一〇月一〇日附の再版、そして一九二七年三月の三版の三種があるが、初版では本編の「二大宣言」の日附が「一九二二年七月」と表示されながら、表紙裏に「一個小聲明」なる注意書きがあって、それには「この小冊子の第二篇（第二次全國大會宣言）は本來一九二二年五月に發せられたものだが、誤って七月としてしまった。ここに特に訂正し、併せてこれを第一篇とすべきむね、聲明する」と記されており、さらに念の入ったことには、一五頁から三四頁までのページ番號を持つ「二大宣言」が、一頁から一四頁までのページ番號を持つ「時局に對する主張」（日附は六月一五日）の前に來るように、製本し直されているのである。すなわち、この初版は、編集、印刷の段階までは、「二大宣言」に七月の日附を與えておきながら、刊行の最終段階でその七月の日附は誤りであるということに誰かが氣づき、訂正

文を入れるだけでなく、冊子の綴じ直しという、常識では考えられない手直しをして刊行されたのである。

ただ、ここで奇妙なねじれが生じた。それは、「二大宣言」には陳炯明の孫文にたいする叛亂（一九二二年六月一六日）のことが言及されていたのだが、「二大宣言」の日附を七月から五月に訂正したことによって、「宣言」は時間的に辻褄の合わない文書になってしまったのである。その時間的なねじれは、『政治主張』の再版、三版でも、そのまま繼承され、定着した。すなわち、再版以降では、「二大宣言」の日附は本編そのものでも五月となり、奇妙な日附設定には何らの説明もないまま、同文書がページ番號の點でも「時局に對する主張」の前に排される形になったのである。こうした點を、現在の『中共中央文件選集』はどう處理しているかというと、版本は一九二六年の『政治主張』に依據するとし、さらに本編末尾の日附部分は「一九二二年五〔七〕月」と表記し、單なる誤記（誤解）と見なして濟ませている。[20] 確かに再版のみを見れば、「五月」という日附は單なる誤記と考え得るのかもしれないが、初版での強引な訂正の仕方にあきらかなように、また再版以降の配列にもあきらかなように、これは單なる誤記などではなく、日附と「宣言」內容の齟齬にあえて目をつぶった意圖的な日附設定なのである。

『政治主張』のこうした奇妙な成書事情に疑問を投げかけ、專論による檢討を加えたのは、藤田正典氏と市古宙三氏である。[21] ただし、兩氏はその謎を解き明かさんとしたものの、「中共二大」の會期そのものも確定的でなかった當時においては、それに明確な答えを出すことはできなかった。それから四十年を經た今日でも、一九二六年半ばになされたこの日附變更の理由を說明することは困難である。市古氏が推測と斷った上で述べた說明（一九二六年夏に陳公博が、中共は當初孫文よりも陳炯明と密接な關係があったということを吹聽したため、中共側は早急にその誤傳を正すべく、中共が陳炯明を「反動」と呼び、孫文を「民主勢力」と呼んだ最初の文書――すなわち「二大宣言」――に、陳炯明の叛亂以前の日附を與えた）は、一つの可能性として現在なお檢討には値する。ただ、それでもやはり、時間の前後撞着を容易に指摘されるような方向への「中共二大」の日附變更が、ここまで強引に行われた理由としては、說得力に缺けよう。

ここでは、こうした文書の改變が、一九二六年の中共の政治狀況への對應（中山艦事件以降、軋轢の目立っていた國民黨との關係、國民黨の主張する北伐への中共の態度など）を何らかの背景としているのであろうということ、[22] つまり二大宣言の日附改變の問題は、あくまで文書公表時（一九二六年）の問題であって、文書作成時（一九二二年）の問題ではなさそうだ、ということを指摘するに止める。ただし、以下に述べる一九二二年における「二大宣言」生成の過程は、この文書が一九二六年になってはじめて、不可解な形で公表されることになる理由を説明する手がかりとなるだろう。ここでもまず吟味すべきは、大會後に國外（アメリカとソヴェト・ロシア）に持ち出された「二大宣言」のテキストである。

二大の決議案の版本解説で觸れたように、二大關係の諸文獻は、アメリカに渡った陳公博の修士論文に附錄として收錄されたわけだが、その中には「二大宣言」も含まれていた。その「二大宣言」自體には第二回大會の日附はないが、英文タイトルには「一九二二年七月の中共二大で採擇された」の字句があり、[23] 陳がそれを七月に開催された黨大會で採擇された文書と考えていたことが確認できる。一方、その內容を見ると、二大の決議案と同樣に、原文書からの忠實な翻譯といってよく、『政治主張』版と同內容（陳炯明叛亂についての言及もあり）である。このことは、我々に少なくとも一つの結論を與える。すなわち、「二大宣言」は、中國國內で廣く知られるようになるのは一九二六年だが、決してそのころに作成された文書ではなく、遲くとも陳公博が中國を離れる（一九二二年一一月）以前の文書であり、一部の黨員は見ることのできたものである、と。

一方、ソヴェト・ロシアに送られた「二大宣言」からは、あまり有益な情報は得られない。まず、先に紹介した瞿秋白の「中國共產黨歷史概論」は、中共二大の決議案と共に「二大宣言」も拔粹紹介しているのだが、こちらの方は中國語文獻（つまり『政治主張』版）を直接に書き寫したものである。『政治主張』は初版だけでも一萬部が瞬く間に賣り切れたというほど廣く流布したものだった[24]から、瞿は「二大宣言」に限っては、『政治主張』版をそのまま利用したのであろう。瞿が「宣言」を一九二二年五月のものとするのは、[25]『政治主張』の表記をそのまま引用した證である。他方、モスクワの

アルヒーフには、中共からある時期にコミンテルンに送られたと見られる露語版の「二大宣言」が存在する。[26] ただし、一九二二年五月の日附を持っているこの文書は、中共二大の決議案などとは別のファイルに綴じられており、これと同じファイルに同じ様式で收められているもう一つの文書（「時局に對する主張」の露語版）が「第一次時局に對する主張」（傍點石川）と題されていることから判斷して、『政治主張』版からの翻譯である可能性が高く、[27]「二大宣言」作成の時期を特定する手がかりにはならない。

ただし、ソヴェト・ロシアに送られた「二大宣言」ということでいうならば、陳獨秀のコミンテルンあて報告（一九二二年六月三〇日附）へのヴォイチンスキーの返書が、中共から送られてきた「宣言」に言及していること、[28] そしてヴォイチンスキーが七月一八日の『プラウダ』に發表した「中國南方の鬪爭」[29]が、「宣言」に酷似する文言を使いながらも、他方、中國の政治勢力に對する論調において、「宣言」と微妙に食い違っていることは、注目に値する。それは、「宣言」が素案起草から定稿となるまでに數カ月の期間を要し、かつ定稿は素案をかなり修正したものであるということを暗示しているからである。先にも述べたとおり、「宣言」は陳炯明と孫文の抗爭に言及し、その際に陳をイギリスの支援を受けた「反動」的人物と呼び、一方で孫文を「民主勢力」と評價しているのだが、ヴォイチンスキーは「中國南方の鬪爭」において、兩者の抗爭にかんして孫を一方的に持ち上げるのではなく、陳炯明を「革命的督軍」「愛國者」「外國帝國主義の仇敵」と高く評價している。ソヴェト・ロシアの關係者が、「宣言」の如く陳をハッキリと批判して、孫文を明確に支持するようになるには、一九二二年の秋を待たねばならない。一方、中共の側にしても、「陳炯明の叛亂の直後、中共は孫に同情的でもなければ、また公然と陳を支援するでもなかった」[30]というのが實情であり、二大時點では、兩者の抗爭に對してはまだまだ觀望的であった。[31]

以上の諸點を總合すると、「二大宣言」の作成過程は、次のように推定することができよう。すなわち、中共は二大に先立ち（詳細な時期は不明）、自黨の基本原則と當面の目標を明示する「宣言」の素案（陳炯明と孫文への言及が現行のテキス

トと同じである可能性は低い）を起草、六月末にそれをモスクワのヴォイチンスキー（コミンテルン）に送って審訂を求めた。おりから陳炯明と孫文の抗争の歸趨をはかりかねていたヴォイチンスキーは「宣言」を、コミンテルン第二回大會の「民族・植民地問題についてのテーゼ」、および極東諸民族大會の諸テーゼに沿うように改訂、充實させる一方で、陳・孫の對立の歸趨と兩者へのソ連側の評價が定まるのを待って、その內容を「宣言」に補充し、恐らくは八月以降にそれを中共側に送り返した。ただし、それを受け取った中共側は、①大會からかなり時間が經ってしまったこと、②「宣言」の大枠はすでに二大決議案（「國際帝國主義と中國、および中國共產黨に關する決議案」）に盛り込まれていること、③中共二大の直後に開催されたいわゆる西湖會議において、民主的連合戰線政策が國民黨への加入という豫想外の形態に急轉回したこと、の諸點に鑑み、「二大宣言」自體の意味が薄れてしまったと判斷し、それの公表を不適切と考えて一部の黨內人士への配布にとどめた、と。そして、「二大宣言」の作成過程が、このように起草から一應の完成まで、中共二大をはさんで數カ月の期間を要したとすれば、それは「宣言」が一九二六年に公表された時、文書の日附にブレが生じた一因となったのではなかろうか。

## 二　大會の會期、場所——定說への道のり

今日では、中共二大は一九二二年七月に上海で開催されたことが動かぬ定說になっており、[32] 會期は七月一六～二三日、また會場も共同租界の南成都路輔德里六二五號（李達の寓居、現在の成都北路七弄三〇號）[33] という細かな點まで判明している。ただ、こうした詳細は、會期にかんしては、前述のように一九六〇年代になって確認された『中國共產黨第二次全國大會決議案』によって、そして會場にかんしては、五〇年代初めの李達の證言（後述）とかれの現地訪問によって、それぞれ決着を見たのであって、かかる定說が成立するまでの道のりは、中共一大のそれと同樣に、平坦ではなかった。とりわけ、會期については、ほとんど唯一の資料であった「二大宣言」の日附が、第一章で述べたように、「七月」から「五月」へ

と不自然に變更されたため、それをめぐって異説が並び立つという狀態が長く續いた。大會文書の發掘やその文言とはやや違って、大會會期やその場所といった事項の確定には、時々の黨史研究がどのような資料に依據して、如何なる體制でなされたのかが大きく關わってくる。定説への道のりを振り返ってみよう。

中共二大の會期にかんする言及として最も早いのは、前章で述べた『中國共產黨五年來之政治主張』（一九二六年）に收める「中共二大宣言」で、一九二二年五月という表示があった（場所については言及せず）。この日附が不自然であることはすでに述べたとおりだが、「宣言」の日附が五月であるからには、大會も常識的に五月に開催されたはずだと考えられたことは間違いない。現に、中共の歷史に言及する二〇年代から三〇年代初めの文章には、五月とするものが多い。このほか、この前後の文獻で大會の期日に觸れたものとしては、『蘇聯陰謀文證彙編』に收める「中國共產黨簡明歷史」がある。よく知られているように、『蘇聯陰謀文證彙編』（一九二八年）は一九二七年四月の張作霖による北京のソ連大使館搜索事件で押收された露語文書から、重要と判斷されたものを漢譯の上、編集したものである。[34]「中國共產黨簡明歷史」は、一九二七年初めに廣州で發行されていた露語雜誌『カントン』に發表されたカラチェフの「中國共產黨小史」[35]を漢譯したものと考えられる。中共幹部への取材をもとにして書かれた該文は、中共二大の期日について、「六、七月に開かれた」（場所については言及せず）と記していた。

こうした中にあって、中共系列の比較的信賴すべき革命史として、大會の時期と場所を示した最初の刊行物が、中國現代史研究委員會（張聞天）編『中國現代革命運動史』（一九三八年刊）である。同書によれば、大會は「七月」に「杭州の西湖」で開催された。[36]「杭州の西湖」は、今日の定説（上海）から見れば誤りだが、これは中共二大の直後に開催され、實際の國共合作路線を決定した中共の幹部會議、すなわち「西湖會議」（一九二二年八月末）と混同したものである。西湖會議は、その「重要性が「二大」よりも大きい」[37]と評されるほどであるから、その開催場所が二大に重ね合わせられてしまったのだろう。

かくて、中共黨史研究においては、「中共二大宣言」の日附のブレが尾を引く形で、「五月」説と「七月」説などが並立したままで、一九四九年の人民共和國成立を迎えることになった。そして、一九五三年をはさんで、それらブレのあった記述が、「七月」に「上海」で開催に一本化されていくに到る。この經過を分析した市古氏は、二〇年代から六〇年代に到る各種の中國革命史（黨史）著作における中共二大の開催期日と場所の表記を一覽表にまとめた上で、中國側の著作が「一九五三年以降は七月上海開催にすべて一致したのには、七月上海で開催されたことを確證する資料が現れたのではなかろうか」と推測したが、當時において中共側の黨史研究の狀態は全くのブラック・ボックスであったため、その確たる資料が「何であるかはわからない」[38]と述べざるを得なかった。それから四十年、今や我々はそのブラック・ボックスの一端をかいま見ることができる。一九五三年以降の黨史記述の統一をもたらした「資料」とは何だったのだろう。

長き苦難の末、一九四九年にようやく新國家をうち立てた中國共產黨は、さっそくに內外の新施策にとり組む一方、一般民衆はおろか、黨員さえ實はよく知らない自黨の歩みを、わかりやすい形で公表する必要に迫られた。また、全國を統治下に置いたことで初めて可能になる全面的な革命史料（黨史資料）の發掘、收集にも積極的にとり組むことになった。五〇年代初期の革命史著作の陸續たる刊行は前者の成果であり、政務院（現國務院）と中共中央がそれぞれ一九五〇年とその翌年に發布した「徵集革命文物辦法」と「黨史資料收集に關する通知」は、後者の活動方針を示したものである。また、長らく上海で祕密裏に保管されてきたいわゆる「中央文庫」（主に三〇年代以前の中共の文書集成）の文獻一萬五千件あまりも、一九四九年暮れには北京に運ばれ、ここに原資料に基づいて公式の黨史を編纂、刊行する條件が整った。[39]そもそも、中共に限らず、共產黨にとっての文書の蓄積と保管は、やがて明らかにされるべき正しい歷史の歩みを證明するための資料の保全にほかならない。瞿秋白が一九三一年に起草した中共の「文件處置辦法」は、嚴重保管される黨內資料が「將來（我らが天下）の黨史委員會に引き渡」されることを想定していたが、[40]これはかれらにとっての文書と歷史の關係を象徵的に示すものであろう。そして、いまやそれら黨の文書は、ついに「我らが天下」となった中共に引き渡されたの

である。

一九五一年の建黨三十周年にあわせて刊行された胡喬木『中國共產黨的三十年』は、そうした條件のもとで刊行された黨史著作の筆頭というべきものである。胡喬木という個人名で執筆されてはいるが、それが限りなく黨の公式見解に等しいということは、胡の當時の職位（中共中央宣傳部副部長）、および、それが刊行に先だって中共中央の機關紙『人民日報』をはじめとする各種刊行物に一齊に掲載されたものであるということに明らかであろう。黨の歩みを振り返る上で、胡喬木（あるいは中共中央宣傳部）はそれまで不確かな記述の多かった黨の初期大會について、何らかの確定的記述をせざるを得なかった。とりわけ、多くの注目を集めることが確實な第一回大會について、細心の注意が拂われたことは疑いない。ただし、この時點では中共一大の諸文獻はまだ確認されておらず、ほとんどが回想錄頼み[41]、また二大についても、「五月か、七月か」、「上海か、杭州西湖か」は未決着の狀態で、頼みの「中央文庫」にも、二大の會期と場所を確定する文書はなかった。かくて、胡喬木は、第一回大會の問題點であった代表の人數については、代表の一人であった李達の經歷申告書[42]とその證言をもとに、『人民日報』掲載の前日に、直々に毛澤東に再確認を行い、「十二人である」という批示を得ていた[43]。

一方、二大の問題點については、『中國共產黨的三十年』（以下、適宜『三十年』と略稱）は「一九二二年五月に黨は杭州西湖で第二回代表大會を召集した」と述べていた。これは、胡喬木らが、會期については二〇年代の『政治主張』版「二大宣言」の不自然な期日をそのまま採用し、一方で場所については、前述の『中國現代革命運動史』の記述に從ったことを物語っている。實は、胡喬木らが中共一大の史實を確定するさいに參照した李達の經歷申告書は、二大にかんしては「八月に、第二回全國黨代表大會が上海で擧行された」と述べていたのだが、こちらは會期にかんしても、場所にかんしても、採用されなかったということになる。こうして、いったんは公式黨史において結論が出たかに見えた二大の會期と場所であったが、この說はわずか三年後に胡喬木自らによって訂正されることになる。すなわち、一九五四年刊行の同書

再版は、この部分の記述を「七月に黨は上海で」に改めたのであった。

これに類似した變化は、『三十年』の前年に刊行されたもう一つの代表的革命史著作である胡華『中國新民主主義革命史（初稿）』[44]にも起こった。一九五〇年三月の『中國新民主主義革命史（初稿）』では、「七月」「杭州西湖」であったものが[45]、同年九月の修訂本（北京第四版）以降では、「七月」「上海」に改められたのである。

最も權威あるこれら黨史著作の改訂をもたらしたものとは何だったか。その内幕を推測させてくれるのが、雜誌『學習』（一九五二年第六期）に掲載された裴桐「中國共產黨第一次全國代表大會到第五次全國代表大會簡況」と、中共中央宣傳部所屬の王眞が一九五三年に内部刊行物に發表した「中國共產黨第二回全國代表大會の會期と會址の問題について」である[46]。中共二大にかんして「七月」「上海」説をとる裴論文は、『三十年』の出版後に書かれた、最初の中共初期大會についての專論であり、發表媒體（中共中央宣傳部の刊行物）と著者（中共の歷史文書管理の第一人者）[47]から判斷して、『三十年』の修正を豫告したものに他ならない。一方、王論文はその修正が如何なる根據によってなされるものなのかを、上司の胡喬木に代わって黨内の一部專門家に内密に説明したものであった。王論文は、『政治主張』版「二大宣言」の日附（五月）が明らかに不自然であることを指摘した上で、前述の『中國現代革命運動史』と李達の回想（大會は七、八月で、暑かった）を根據にして、「七月に開催されたという説が比較的確かである」と述べ、また場所については、スノーの『中國の赤い星』、および李達らの回想を根據にして「會址は上海であるという説が比較的確かである」と結論していた。一大と違って、この二大には毛澤東や董必武といった黨の現首腦が出席しておらず、胡喬木が出席者數を毛に直接に確認するという一大の手法が使えなかったため、主には李達の回想によって二大の問題點を解決しようとしたことがわかる[48]。

だが、王論文が引く李達の回想（「七、八月に開催された」）は、微妙な點で、胡喬木が『三十年』初版執筆のさいに參照したはずの李達の經歷申告書（「八月に擧行された」）とは異なっている。これはどういうことだろう。實は、李達は一大、二大という黨の初期大會の開催責任者のうち、人民共和國に殘った唯一の人物として、一九四九年の再入黨申請以降、繰

り返し初期黨大會の狀況にかんする問い合わせを受けていた。インタビュアーがまとめたものを含めて、おびただしい數の回想文が殘っている。『三十年』の出版前後で言えば、上述の經歷申告書のほかに、はっきりと確認できるものだけでも、一九五一年に二篇、五二、三年に一篇、五四年に一篇、五五年に一篇がまとめられている。[49] この間、中共一大にかんする李達の記憶に搖るぎはなかったものの、二大の會期についてのかれの記憶は、極めてあやふやだった。時系列に沿って言えば、一九四九年には「八月」と述べていたものが、一九五二、三年には「七、八月」になり、一九五五年には「七月」に、そして一九五九年には「六月下旬」[50] へと變化をくり返したのである。この記憶の搖れが物語っているものはただ一つ、それは、ほぼ唯一の當事者として、繰り返し同じ問いを浴びせられた李達にとって、三十年前の出來事の場所（上海にあった自らの寓居）はともかく、それが何月だったかなど、到底思い出せるはずもなかったということである。

ただし、李達にとって會期の記憶が搖れ動くということと、公式の黨史において會期が搖れ動くということの重みは、まるで異なる。李達のある時點での記憶に基づいて、七月開催說に傾いた中共中央宣傳部ではあったが、修正された會期の公表には一定の手順が踏まれた。すなわち、內部刊行物で七月說を採ると述べた王眞は、その後一九五三年一〇月に刊行した公開發行の自著では、なお『三十年』初版を尊重して「一九二二年五月の第二回大會」と表記し、『三十年』の改訂版（一九五四年）が「七月上海」に改めたのを待って、自著の方も修訂版の際に、ようやく「七月」に變えたのだった。[51]

こうした經緯は、ごく一部の當事者以外には、まったく知られることはなかった。中國國內ですらそうなのだから、いわんや國外の中共黨史研究者となればなおさらである。前述の市古氏は「胡喬木が五月杭州というのを七月上海に改めたのは、何等か確たる證據が出て來たに相違ない」と述べたが、實はその「確たる證據」とは、實は十年以上も前から知られており、それ自體は根據を示さない『中國現代革命運動史』と、たまたまそれに符合した李達の回想に過ぎなかったのである。すでに述べたとおり、中國で中共二大の會期が最終的に確定するのは、『三十年』修訂本の刊行から五、六年の後、上海で『中國共產黨第二次全國大會決議案』という一九二二年當時の文書が發見され、その中に大會の會期を記した

規約（中國共產黨章程）が含まれていることが明らかになってからである。ただし、ほぼ同じ時期にこれとは別に發見・確認された中共一大の文書が、革命博物館への展示の前にして、田家英（毛澤東の祕書）によって公表に待ったをかけられたように、[52] 中共二大の文書も一九八〇年代初めまで公表されることはなかった。そして、それらが公表されるや、大會會期の問題ははそれで決着濟みという扱いになり、以前の定説化への不透明な過程は、それが實はブラック・ボックスだったことも含めて、忘れ去られてしまったのである。

## 三　中共二大の代表名簿

一九七〇年代末からの改革・開放政策は、それまで多くの「禁區（タブー）」にがんじがらめにされていた黨史研究に春をもたらした。文革の時期に編纂が中斷していた資料集は、最初は内部發行という手探りの形で徐々に、そして間もなく奔流のように續々と刊行されだした。中共二大について言えば、『中國共產黨第二次全國大會決議案』所收の二大文獻が八〇年代半ばには公刊され、多くの人がそれを簡單に見られるようになった。中共二大の會期や場所の確定に至る紆餘曲折の歩みなどは、もはや遠い日の出來事として、話題にすら上らなくなったわけだが、それは黨史研究の立場からする中共二大の事實解明が終わったことを意味するものではなかった。黨史上の畫期となる大會を絶えず記念し、顯彰（あるいは檢證）し續けるという黨史研究が免れがたく負っている政治性ゆえに、期日や場所がわかったら、次は大會代表者の數、さらにはその顔ぶれ如何という課題が次々に現れ、黨史はそれに答えることを期待されるからである。その意味でいえば、中共二大の代表者數とその顔ぶれは、今日にいたっても黨史研究の課題であり續けている。

中共二大の會期や場所すら判然としなかった一九四九年以前には、大會代表の數やその顔ぶれなどは、さして大きな問題ではなかった。これは中共一大の代表數やその名簿が比較的早くから議論の對象となっていたのとは、大きく異なっている。ただし、意外なことに、中共二大の參加者やその顔ぶれは、早くも一九二八年に公式の場で檢討されたことがあっ

た。一九二八年六、七月にモスクワ郊外のペルヴォマイスコイェで開催された中共第六回大會のさいである。中共第六回大會は、失敗に終わった大革命とその前後の中共の路線を總括し、來るべき新情勢での活動方針を討議するために、ブハーリンらソ連首脳の指導を受けながら開催されたもので、大會の運營はソ連共產黨のそれに範をとり、極めて嚴格に行われた。この大會のさいに、黨の組織面での歷史を振り返り、公式の統計を作成する目的で、中共の歷次大會の代表者數とその名簿、そしてその當時の黨員數にかんする統計が作成されたのである。

現在、六大のさいに作成された統計表自體を見ることはできないが[53]、それを拔粹したものが、趙朴「中國共產黨組織史資料」などに掲載されている。それらを整理すると、六大時の統計表では、中共二大當時の黨員數は一二三人、大會代表は十二人、その顏ぶれは、「陳獨秀、張國燾、蔡和森、譚平山、李震瀛、楊明齋、施存統、李達、毛澤東、許白昊、羅章龍、王盡美」となっていたことが確認できる[54]。これと同樣の統計は、中共二大だけでなく、六大以前のすべての大會にかんしても作成されている。察するに、六大向けの文書として、そうした統計の作成が提起され、當時モスクワにあった六大の代表たちが、それぞれの關わった大會について、共同で名簿や黨員數などを回想しあってまとめたのであろう[55]。中共六大では、大會十三日目（六月三〇日）に周恩來が組織問題にかんする報告を行っており、統計表は、それへの準備として作成された可能性が高い。ただし、この統計表は、各大會時の全黨員數がそれぞれの大會時に報告された數字（主には一九四九年以降に發見された文書で確認できるもの）と食い違っていることからも明らかなように、何らかの記錄に基づいて作成されたものとは言い難く、畢竟は集團回想の域を出るものではない[56]。

二大の代表者については、こうした「統計」はあったものの、それが一九四九年以前の中共黨史著作に利用されることはなかった。元來が不確かな數字と名簿だったから、當然の仕儀であっただろう。例えば、ミフ『英勇奮鬪的十五年』（一九三六年刊）や前述の『中國現代革命運動史』など、三〇年代に中共關係者によって執筆された著作は、中共二大にかんして、代表二十人、黨員百人前後と述べ、六大時の統計とは別の數字を擧げている。ただし、代表二十人、黨員百人

前後というその記述も、何らかの確かな記録によるもののようには見えないし、またそれが不確かであるとして問題視された形跡もない。[57] 中共二大の出席者やその人數（および當時の黨員數）が黨史著作の中に具體的に盛り込まれるようになるのは、やはり人民共和國成立以後である。

第二章で述べたように、人民共和國成立後の黨史の記述を規定したのは、胡喬木の『中國共産黨的三十年』と胡華の『中國新民主主義革命史（初稿）』であった。このうち、『三十年』には、初版、再版を通じて、二大の出席者數やその名簿、あるいは當時の黨員數などは記述されなかった。他方、『三十年』よりも詳しい『中國新民主主義革命史（初稿）』（以下、適宜『革命史』と略稱）には、それらにかんする情報が盛られるだけでなく、それら情報は版を重ねるたびに改訂されていった。それぞれの版を比較すると、時々の改訂が如何なる根據によってなされたのかを明らかにすることができる。『革命史』は、一九五〇年三月に初版が出て以來、同年九月の北京第四版、五一年一〇月の北京第八版、五二年一二月の北京第十一版でそれぞれかなりの修訂が加えられているが、[58] 二大の出席者などの項目が大きく變化したのは、北京第十一版（「後記」の執筆は一九五二年八月二五日）の時で、それまでの「代表二十人、黨員百人前後」が、「代表は鄧中夏、蔡和森、向警予ら十二人、黨員一二三人」へと大きく變わっている。どうやら、それまでは、代表二十人、黨員百人前後という『英勇奮鬪的十五年』や『中國現代革命運動史』の說がそのまま援用されていたものが、第十一版の時點で、代表十二人、黨員數を一二三人と特定できるような新資料が見つかり、さらに、代表の中に鄧中夏、蔡和森、向警予がいたという資料なり、證言なりが得られたらしいということが確認できる。

まず、「代表十二人、黨員一二三人」という具體的な數字だが、これが前述の六大時に作成された統計表（「中共歷次大會代表和黨員數量增加及其成份比例表」）の數字であることは誰の目にも明らかであろう。六大の議事細則によれば、大會の各種文書は、祕書處が三部抄本を作り、一部はコミンテルンに、一部はコミンテルン駐在中共代表團に送られ、そしてもう一部は中共中央自身が保管することになっていた。[59] そして、三〇年代以前の黨の原文書の集成である「中央文庫」が、

前述のように、一九四九年暮れには上海から北京に運ばれていたことを勘案するならば、そうした原文書の整理が一九五二年までにようやく濟み、その中から發見された六大時の統計表によって、「代表十二人、黨員一二三人」という數字が一九五二年の『革命史』第十一版から盛り込まれたと考えることができる。

一方、「鄧中夏、蔡和森、向警予ら」という具體的な代表者名は、どこから來たのだろうか。十一版以降に採用された六大時の統計表（二大代表名簿）には、十二人という數字はあったものの、鄧中夏と向警予の名はなかった。にもかかわらず、胡華が蔡和森とともに、あえて鄧と向の名を擧げたのは、ここでも李達の證言を採用したものだと考えられる。一大、二大の代表だった李が、一九四九年以降、黨の初期の大會、活動について、繰り返し證言を求められたということはすでに述べたが、そのかれは一九五〇年代初めの回想の中で、まさに「鄧中夏、蔡和森、向警予ら」の名前に言及しており、その際、そうした二大關連の情報は「すでに胡喬木に話してある」と自ら述べているのである。[60] 鄧と向の名が突然に現れた理由は、この李達證言以外には考えられまい。すなわち、十一版の時點では、六大時に作成された統計表の數字の方は採用されたものの、二大代表の名簿については、信憑性薄しと判斷されたと言うことができるだろう。

こうして中國においては、その後の政治的な動亂に伴う黨史研究の逼塞という事情もあり、二大の代表は鄧中夏、蔡和森、向警予ら十二人、當時の黨員一二三人という說は、積極的に肯定も否定もされぬまま、四半世紀以上の時が流れることになる。この間、北米に閑居していたかつての大幹部、張國燾が回想錄を發表し、二大の代表名簿にかんして、正式代表九人（陳獨秀、張國燾、李達、蔡和森、高尙德〔高君宇〕、包惠僧、施存統、上海代表〔氏名未詳〕、杭州代表〔氏名未詳〕）と張太雷、向警予らの非正規代表（列席者）の名前を擧げるといったことはあった。[61] ただ、それとて當時の黨員數を一二三人としていることに明らかなように、結局は胡華の『革命史』（第十一版以降）などを參照しつつ、その不足を自らの記憶で補ったものにすぎなかった。[62]

さて、改革・開放期における黨史研究復活の烽火となったのが、中共一大にかんする邵維正の考證論文（一九八〇年）

であったことは比較的よく知られているが、中共二大の考證についても、この時期に先鞭をつけたのは、それとほぼ同時期に發表された邵維正と徐世華の共著論文である。[63] ただし、この論文は中共二大の代表名簿については、何らの注釋もつけることなく、十二人の名前（陳獨秀、李達、張國燾、蔡和森、高君宇、施存統、項英、王盡美、鄧恩銘、鄧中夏、向警予、張太雷）と當時の黨員數（一九五人）[64] を擧げるのみであり、その細かい考證は、翌年に徐世華が單獨で發表した專論[65] に委ねられた。では、徐世華論文はどうなっているかというと、六大時に作成された前述の統計表によって代表數を十二人とする一方で、それを――恐らくは張國燾回想を援用して――九人の正規代表（陳獨秀、李達、張國燾、蔡和森、高君宇、施存統、項英、王盡美、鄧恩銘）と三人の列席代表（鄧中夏、向警予、張太雷）に分けている。六大時の名簿（十二人）と比較すると、譚平山、李震瀛、楊明齋、毛澤東、許白昊、羅章龍の六人の名前が落とされて、代わりに高君宇、項英、鄧恩銘、鄧中夏、向警予、張太雷の六人が補われる格好になっているのだが、その根據たるや多分に主觀的な推定であり、譚平山、李震瀛、楊明齋、許白昊、羅章龍、鄧恩銘に至っては、實ははずさなければならない理由、あるいは補充しなければならない理由は何も説明されていない。また、向警予については、張國燾の回想を根據にしているのだが、張の回想が胡華『革命史』などに依據していることは先に述べたとおりであり、さかのぼれば、『革命史』は搖れ動く李達の回想のうちの一つに依據しており、さらに言えば、その李達は「向警予、鄧中夏」らの名前を擧げた數年後には、「代表はハッキリ覺えていない」[66] という狀態だったのに、徐論文ではこうした事情は全く考慮されていないのである。つまり、根據を伏せたまま定説のみが提示される中共黨史の著述體質を問うことなく、引用のさらに引用からなっている諸資料を、主觀を交えて「比較考證」した結果、徐論文は極めて混亂した名簿を作り出してしまったのだった。

中共一大の場合であれば、その象徵的意味の大きさからしても、また回想錄の多さからしても、このような安易な考證では到底すまないはずだが、不思議なことに、結果的に黨史上の著名人を多く含んだ徐論文の二大代表名簿は、何らの反論を呼ぶこともなく、普及してしまった。一九八〇年代から九〇年代にかけて刊行された「新時期」革命史・黨史著作は、

曖昧な典據表示のまま――徐論文には言及することなく――徐論文の結論した十二人の代表者名を、おおむねそのまま採用したのである。例えば、『中國新民主主義革命史　偉大的開端』（一九八三年）、『中國共產黨歷史』上卷（一九九一年）、『中國共產黨上海史』（一九九九年）などが、明示こそしないものの、徐論文の說を踏襲している。

ただし、その後の著作がすべて徐論文のそれに歸一したわけではない。中共の組織史沿革表の代表である『中國共產黨組織史資料彙編』（一九八三年）では、徐論文と六大時の名簿を混ぜたような名簿が掲げられ、代表十二人（陳獨秀、張國燾、李達、蔡和森、鄧中夏、陳望道、高君宇、楊明齋、施存統、項英、王盡美、李震瀛）の他に、張太雷、向警予、鄧培、鄧恩銘、林育南らの列席者がいたとされ、同書の增訂本（一九九五年）では、譚平山を代表におぎない、楊明齋を列席者に回す變更がなされている。しかしながら、それらの根據は示されておらず、結局のところ、何に基づいて名簿が作成されたのかは不明である。唯一、これまでの名簿には全くなかった陳望道の名が唐突に擧がっているのは、恐らく、一九八〇年代以降に明らかになった蔡和森「中國共產黨史的發展（提綱）」（一九二六年）が、二大前後に黨の「鐵の規律」に反對した者として、陳望道の名を擧げた[67]ことが反映されたのだろうという推測ができるのみである。かくて、八〇年代から九〇年代にかけて刊行された中共黨史人物の傳記においては、例えば向警予の傳記を見れば彼女の二大出席にかんする記述があり、譚平山の傳記を見ればかれの二大出席にかんする記述があり、また鄧中夏の傳記を見れば……といった混亂が發生することになったのだった。こうした記述のブレは、二つのことを我々に敎えてくれる。すなわち、二大の代表者問題は容易には解決できない問題であるということ、そして中共黨員においては、重要な黨大會への出席は黨歷における不可缺の顯彰事項であるということである。

さて、かくの如くに困難な二大の代表確定問題は、現在、いかなる決着を見ているのだろうか。中共の歷次黨大會、および黨組織にかんする現在の公式記錄と公式黨史は、一九九〇年代末以來、「陳獨秀、張國燾、李達、楊明齋、羅章龍、王盡美、許白昊、蔡和森、譚平山、李震瀛、施存統など十二名（一人は姓名未詳）」という統一見解を提示している[68]。こ

のうち、『中國共産黨組織史資料』はその根據として、中共六大「中共歴次大會代表和黨員數量增加及其成份比例表」と英文の「わが黨の組織問題について（補充報告）」（一九二二年二月九日）を擧げている。前者については改めて説明するまでもあるまい。一方、後者は未公刊資料の如く見えるが、實は内容はすでに知られているもので、大會代表を「七つの地區から各一人」の「七人」とするものである。[69] ただし、これには代表の氏名は記されていない。つまり、後者の資料は、資料名こそ擧がっているが、代表者名の特定には何ら關係のないものなのである。したがって、現在の公式見解は、先に掲げた六大時の名簿を基本的にそのまま踏襲し、その名簿にあった毛澤東だけを除外したものと結論づけることができる。毛を除外したのは、かれ自身がスノーとの會見の中で中共二大に觸れ、「私も參加するつもりでした。ところが、開催される場所の名前を私は忘れてしまい、同志たちの誰をも探しだせず、出席できませんでした」[70] と述べているからに他ならない。

こうして巡りめぐったあげくに、二大代表の資料的根據は、六大の代表たちの集團回想に基づく名簿に立ち戻ったわけだが、その名簿には毛澤東一人をとってみても、このような不整合がある以上、毛の他にそのような例がないという保證はどこにもない。[71] かくして、現在の中共黨史における史實なるものは、もとづく資料の正確さ如何というよりも、むしろ資料の權威性によって左右されていることが知れよう。その意味でいえば、二大にかんする資料のうちで、最も權威があるのは――かりにそれがあやふやな回想の集合體であったとしても――中共六大という黨大會の關連文書なのである。

では、こうした事情で決定された二大の代表者について、最新の研究はどのような立場に立っているのか。本稿冒頭でも述べたように、二〇〇二年に發表された王志明論文[72]はここ二十年の間にこの方面にかんして書かれたほぼ唯一の專論だが、同論文は三種の説（張國燾説、徐世華説、『中國共産黨組織史資料』説）があると説明した上で、『中國共産黨組織史資料』説に與すると述べている。その根據は、それが最新の説であり、依據する資料（中共六大時の名簿と英文「わが黨の組織問題について（補充報告）」）が最も信賴に足るからであり、そして何より黨が公式に表明した見解であるからだという。早い話

が、王論文は、張國燾説にせよ、徐世華説にせよ、あるいは『中國共産黨組織史資料』説にせよ、それぞれが依據した資料の生成事情をよく知らぬまま、それぞれの長短を論じ、最終的には最も權威ある説に附和雷同しているだけなのである。諸文獻の中で最も權威性の高い資料に依據することで生まれる定説、その因って來たる事由を知ろうともしないまま、定説という名の權威に附和して再生産される研究論文、そしてそうした過程を積み重ねるごとに省略、祕匿されていく資料的根據。本稿が中共二大の研究史に卽して明らかにしてきたこうした黨史研究の歩みからするならば、王論文は黨史研究のある形態――思考の自發的停止――を、良くも惡しくも全面的に引き繼ぐものだと言えるだろう。

歷史には確定できないことがある。それは黨大會でも、ほかの歷史の一コマでも變わりはない。にもかかわらず、黨大會であるがゆえに、それを細部まであきらかにせずには濟まされぬ黨史のありよう、そこからは現今の共産黨像をもって往時の中共にあてはめたり、權威によって歷史事實を屈服させようとする姿勢は見えても、毛澤東が大會の場所を忘れてしまったから出席できなかったと言い放った歷史のリアリティは汲みとれまい。中共二大の代表の顔ぶれに關しては、それは明らかになっているはずだと多くの人が思い、そして幾人かの專門家は明らかにできるはずだと思っている。しかしながら、どんなに頑張っても、現在のところ、大會には七人ほどの代表が出席したらしい[73]、そしてその代表の中には、自ら大會の模樣を振り返った陳獨秀、張國燾、蔡和森、李達らはほぼ間違いなくいたようである、としか言えないのである。第二回大會當時の中共は、大會代表者の名簿に相當する文書を殘さなかった、あるいは名簿などなくても黨の運營には何らの支障もなかった。實はこうした事實こそが、一見それらしい大會代表者名簿よりも、當時の黨の姿をはるかによく映し出しているのではなかろうか。

**註**

（1）蔡和森「中國共產黨史的發展（提綱）」（一九二六年の文書）（『蔡和森的十二篇文章』人民出版社、一九八〇年、三一頁、中央檔案館編『中共黨史報告選編』中共中央黨校出版社、一九八二年、三五頁）。

（2）中共中央黨史研究室『中國共產黨歷史』第一卷、中共黨史出版社、二〇〇二年、一〇〇～一〇二頁。

（3）王志明「關於出席中共「二大」的代表名單問題的探討」（中共一大會址紀念館・上海革命歷史博物館籌備處共編『上海革命史資料與研究』第二輯、上海三聯書店、二〇〇二年）。

（4）徐世華「關於中共「二大」代表和中央委員名單的考證」（『歷史研究』一九八一年第二期）。中國國外では、これに先だつ中共二大の文獻考證、大會考證として、C. Martin Wilbur (ed.), *The Communist Movement in China: An Essay written in 1924 by Ch'en Kung-po*, New York, 1960 (rev. 1966) の解說部分、および、藤田正典「中國共產黨の初期全國代表大會關係文書について」（『東洋學報』四五卷三號、一九六二年）という研究がある。ただし、中國國內における研究狀況については、當時それがほとんど國外に傳わらなかったという事情があるため、當然ながらこれら研究においては、中國における定說の生成については、ブラック・ボックスのままであった。

（5）中共一大自體を取り卷く言說の分析については、拙著『中國共產黨成立史』（岩波書店、二〇〇一年）二七五～二八六頁參照。

（6）「中國共產黨對於時局的主張（一九二二年六月一五日）」（中央檔案館編『中共中央文件選集』第一冊、一九八九年、三三～四六頁）。なお、回想資料ではあるが、張國燾によれば、上海の中共中央でこの文書が決定されたのは六月一〇日で、その後ただちに張が北京にそれを持っていったという（張國燾『我的回憶』第一冊、明報月刊出版社、一九七一年、二三四～二三五頁）。

（7）前掲『中共中央文件選集』第一冊、四九頁。

（8）中央檔案館・廣東省檔案館編『廣東革命歷史文件彙集』甲一、廣東人民出版社、一九八七年、九～一〇頁。

（9）『蘇聯陰謀文證彙編』（京師警察廳、一九二八年）「中國共產黨類」所收の「中國共產黨簡明歷史」（およびそれと同系列の S. N. Naumov, A Brief History of the Chinese Communist Party, in: C. M. Wilbur and J. L. How, *Missionaries of Revolution: Soviet Advisers and Nationalist China, 1920-1927*, Cambridge, Mass., 1989〔原文は Капачев [С. Н. Наумов], Краткий очерк истории Китайской коммунистической партии, *Кантон*, 1927, No.1〕）、米夫（ミフ）『英勇奮鬪的十五年』（一九三六年刊、『米夫關於中國革命言論』人民出版社、一九八六年、四七六頁）、張聞天編著『中國現代革命運動史』（一九三八年版の覆刻、中國人民大學出版社、一九八七年、一八三～一八八頁――同書は、「中國現代史研究委員會編」として刊行されたも

のだが、實際に著述、編纂に當たったのは、張聞天であるという〔同書所收の莫文驊「『中國現代革命運動史』的寫作經過」參照〕など。

（10）費雲東・潘合定編著『中共文書檔案工作簡史』（檔案出版社、一九八七年）には、中共の文書保管部門であった「中央文庫」が一九三〇年代半ばに作成したという文書目錄の一部が掲載されており（五三頁）、この中に二大の四つの決議案の名が見える。ただし、これら決議案は、中共が四〇年代初めに編纂した『六大以前』などに收錄されることはなく、中共が原文書自體を保管していたか否かは、判然としない。

（11）「政治決議案、組織決議案、婦女運動決議案、および第二次全國代表大會宣言などの四つの文書が通過した」という形で具體的に言及した最初の例は、裴桐「中國共產黨第一次全國代表大會到第五次全國代表大會簡況」（『學習』一九五二年第六期〔九月〕）ではないかと考えられる。ちなみに、著者の裴桐は、延安時代から中共中央祕書處材料科科長など勤めた中共文書管理部門の第一人者であり、人民共和國では、ソ連からのコミンテルン駐在中共代表團アルヒーフ（中共駐共產國際代表團檔案）返還作業に實務責任者として携わり、その後、中央檔案館副館長などをつとめた。

（12）中央檔案館が一九五六年に編纂を開始した全一三七卷からなる大型の黨史文獻集のこと（裴桐「我從事檔案工作的體會」『中央檔案館叢刊』一九八六年第二期、王明哲「近十年中央檔案館編輯出版檔案史料的情況」『黨的文獻』一九八九年第五期）。のちの『中共中央文件選集』（內部發行版、十四册）、『中共中央文件選集』（公開發行版、十八册）の基礎となった。

（13）蘇曉「中國共產黨早期歷史檔案保存及公布情況概述」（『北京黨史研究』一九九七年第五期）の引く王漁（中共中央黨校教研部教授で、當時の革命資料收集運動の責任者）の證言。なお、一九五〇年代末と言えば、ソ連から中國に返還された中共駐共產國際代表團檔案の調査と重要文獻の翻譯がなされていた時期にあたる。周知のように、その中にはそれまで存在しないと思われていた中共一大の文書が含まれており、中央檔案館はそれらを『黨史資料彙報』という內部資料に掲載する一方、一大の出席者であった董必武にその文書の鑑定を依頼していた（李玲「「中國共產黨第一個綱領」俄文本的來源和初步考證」『黨史研究』一九八〇年第三期）。中共駐共產國際代表團檔案に、二大の決議案（露語版）などが含まれていたことは、後述のように閒違いないから、中國ではこの時期に內外から二大の決議案が見つかったことになる。

（14）Wilbur (ed.), *The Communist Movement in China: An Essay written in 1924 by Ch'en Kung-po*, New York, 1960 (rev. 1966).

（15）葉永烈『紅色的起點』上海人民出版社、一九九一年、二七～二八頁。なお、葉によれば、ウィルバーの本が知られるようになったきっかけは、中國革命博物館員が『東洋學

報』に掲載された前掲藤田論文を目にしたことであったという。

（16）ロシア國立社會・政治史アルヒーフ（RGASPI）所藏資料――以下、「アルヒーフ」と略稱――ф.514, оп.1, д.33, л.1-41. ただし、中共二大關係の文書を收めるこの文書綴りには、「二大宣言」は含まれていない。

（17）中央檔案館編『中共黨史報告選編』（中共中央黨校出版社、一九八二年）で公表されたのち、『瞿秋白文集（政治理論編）』第六卷（人民出版社、一九九六年）八七四～九二四頁に收錄されている。筆者が「アルヒーフ」で行った調査によれば、「中國共產黨歷史概論」に引用されている資料のほとんどが、「アルヒーフ」（舊時の「マルクス・レーニン主義研究所中央黨アルヒーフ」）所藏の中國共產黨關係ファイル（ф.514, оп.1）に含まれていた。一九四九年以前に、いわゆるモスクワ・アルヒーフを用いてなされた中共黨史研究はこれがほぼ唯一のものである。

（18）「陳獨秀在中國共產黨第三次全國代表大會上的報告」（前掲『中共中央文件選集』第一册、一六七頁）。

（19）『中共中央文件選集』は、それら小册子版をより正確な原文書と判斷して、『嚮導』掲載版ではなく、それぞれ『中國共產黨第三次全國大會決議案及宣言』『中國共產黨第四次全國大會議決案及宣言』を底本としている（第一册、一六五～一六六、三九〇～三九五頁）。なお、一部の革命文物圖錄には、『中國共產黨宣言』という表紙の印刷物（中身は「二大宣言」）が收錄されている（『黨史研究』一九八〇年第五期表紙裏、中國革命博物館編『中國共產黨七十年圖集』上册、上海人民出版社、一九九一年、一二四頁）が、これは一九二二年に印刷されたものではないようである。

（20）これによって、同選集の依據した底本なるものが、『政治主張』の再版であることが知れる。前述のように、『政治主張』は一九二六年に初版と再版が出ているが、初版の本編では、第二回大會の日附は、「一九二二年七月」となっており、再版よりその日附が「一九二二年五月」に改められたからである。

（21）前掲藤田「中國共產黨の初期全國代表大會關係文書について」、および市古宙三「『中國共產黨五年來之政治主張』について」（『近代中國研究センター彙報』第五號、一九六四年）。

（22）一九二六年の中共、國民黨には、このほかにも政治情勢への對應に起因する文書やスローガンの作成、改訂が數多く確認できる。狹間直樹「〝三大政策〟と黃埔軍校」（『東洋史研究』四六卷二號、一九八七年九月）、同「「中國國民黨第一次全國代表大會宣言」についての考察」（狹間直樹編『中國國民革命の研究』京都大學人文科學研究所、一九九二年）、北村稔『第一次國共合作の研究』（岩波書店、一九九八年）一〇六～一〇八頁、等參照。

（23）英文タイトルは「The Manifesto of the Communist Party of China adopted in July 1922 by the Second Congress」である。ウィルバーは、このタイトル中の日附が翻譯のもとに

なった原文書にあったものか、陳公博が書き加えた（陳は論文本編では、大會は七月に開催されたと記述）ものかは、不明であると述べている（Wilbur, *op. cit.* [rev. 1966], p.35）。

（24）『嚮導』第一六三期（一九二六年七月一四日）の廣告「中國共產黨五年來之政治主張出版」。また、同じく第一五二期の「本報啓事」によれば、『政治主張』は『嚮導』の定期購讀者に對して同送されていた。同書が相當に廣く行き渡っていたことが知れる。

（25）前掲『瞿秋白文集（政治理論編）』第六卷、八八五頁。

（26）Манифест Второго Все-китайского конгресса (Май 1922 года)〔第二次全中國大會の宣言 一九二二年五月〕（「アルヒーフ」ф.514, оп.1, д.34, л.1-15）。

（27）一九二二年に發表された「時局に對する主張」には、當初「第一次」という文言はついていなかった。中共がその後に、第二次、第三次の時局に對する主張を出し、それらを一九二六年にまとめる段になって、一九二二年の「主張」に「第一次」の文字を冠したのである。

（28）「ヴォイチンスキーより中共中央あての書簡」（*ВКП (б), Коминтерн и Национально-Революционное Движение в Китае : Документы, Т.1. (1920-1925)*, Москва, 1994, стр.111-114. 漢譯 中共中央黨史研究室第一研究部編譯『聯共（布）、共產國際與中國國民革命運動（一九二〇～一九二五）』北京圖書館出版社、一九九七年、一一七～一二〇頁）。この書簡には日附がないが、資料集の編者は一九二二年八月と推定している。また、この書簡が「諸君らによって發せられた宣言と國內の民主人士への呼びかけ」として言及しているもののうち、「宣言」（манифест）にかんして、編者はそれを「中國共產黨の時局に對する主張」を指すとしている（「國內の民主人士への呼びかけ」については注釋なし）が、これは正しくない。「國內の民主人士への呼びかけ」こそが「時局に對する主張」であり、「宣言」とは「二大宣言」のことである。

（29）Г. Войтинский, Борьба на юге Китая, *Правда*. 同樣の態度は、一九二二年七月二七、二八日の『プラウダ』に掲載されたマイスキーの論評「中國と中國の鬪爭」でも表明されていた。

（30）前掲カラチェフ「中國共產黨小史」（註（9）參照）。

（31）譚平山が「滌襟」のペンネームで『努力週報』第一六號（一九二二年八月二〇日）に發表した「記孫陳之爭」（陳炯明にやや肩入れする論評）は、この時期の中共の對應の一端を示すものであろう。「滌襟」が譚平山のペンネームであることは、胡適の日記（八月一六日）に明らかである（曹伯言整理『胡適日記全編』第三卷、安徽教育出版社、二〇〇一年、七六二頁）。なお、中共中央が、陳炯明に肩入れする廣東の黨員をはっきりと批判するようになるのは、一〇月以降である（「國人應當共棄的陳炯明」『嚮導』第八期、一一月二日、「嚮導週報與珠江評論」同第一〇期、一一月一五日、「香港通信　陳炯明與嚮導週報」同第一一期、一一月二二日）。

(32) 中共は一九二一年一一月の時點で、次の大會を次年七月に開催する豫定である旨、地方の組織に傳えていた（「中國共產黨中央局通告（一九二一年一一月）」『中共中央文件選集』第一册、二六頁）。なお、中共二大は、當初、社會主義青年團の大會に引き續いて廣州で開催される豫定だったが、陳炯明の叛亂の影響で上海に變更されたという說がある（牛崇輝・王家進『高君宇傳』中共黨史出版社、一九九九年、一二三頁）が、その根據は不明である。

(33) 二大會址の確定の事情については、陳沛存「有關中共二大會址的門牌問題」（『上海革命史資料與研究』第三輯、上海古籍出版社、二〇〇三年）參照。

(34) 『蘇聯陰謀文證彙編』の文書には、「駐華武官あての訓令」のように、張作霖政權が反共施策の一環として捏造したものが混じっているということには注意が必要である（習五一「蘇聯〝陰謀〟文證《致駐華武官訓令》辨僞」『歷史研究』一九八五年第二期、同「查抄蘇聯大使館內幕」『北京檔案史料』一九八六年第二期參照）。ただし、同書に收められたすべての押收文書が僞造というわけではなく、そのうちのいくつかについては、モスクワ・アルヒーフで原文に相當するものが發見されている（В. Н. Усова, Пять Документом 1925 г. Советской Разведки в Китае, *Восток*, 2001, No.3〔「在華ソヴェト諜報機關の一九二五年の五つの文書」『ヴォストーク』〕）。

(35) 註（9）參照。なお、この文章は、一九五三年に英譯版からの漢譯（實は相當に削除された部分がある）が、葛薩廖夫著、張誠譯「中國共產黨的初期革命活動」として『黨史資料』第七期（一二月）に掲載された。「葛薩廖夫」なるロシア人名が、いい加減な當て字だったことも手傳い、この「中國共產黨的初期革命活動」はその後に、原典、出所を明記しないまま中國の刊行物に轉載されたため、あたかも神祕的な新資料のように扱われることになった。

(36) 前掲張聞天『中國現代革命運動史』一八四頁。ただし、同書は別の箇所では、「第二回全國代表大會宣言の發表からひと月餘り後、中國共產黨はその『第一次時局に對する主張』を發表した」（一八七～一八八頁）と述べて、中共二大が五月であるか、もしくは「宣言」が大會とは別に出されたと讀める餘地を殘していた。

(37) 司馬璐『中共的成立與初期活動（中共黨史暨文獻選萃第二部）』香港自聯出版社、一九七四年、二〇六頁。

(38) 前掲市古「『中國共產黨五年來之政治主張』について」。

(39) 中國共產黨における文獻の管理、および「中央文庫」の歷史については、前掲『中共文書檔案工作簡史』四八～五九、一七五～一七八頁參照。

(40) 中央檔案館編『中共文書檔案工作文件選編（一九二三―一九四九）』檔案出版社、一九九一年、五〇頁。

(41) 中共一大の參加者にかんする定說の變遷については、前掲拙著『中國共產黨成立史』二七五～二八六頁參照。

(42) 李達（一九二三年ごろに離黨）が一九四九年に北京で再入黨しようとした際に、中共に提出した經歷書で、後に「李達自傳（節錄）」というタイトルで、『黨史研究資料』

（一九八〇年第八期）に收錄された。

（43）「在胡喬木關於『中國共產黨的三十年』一文中幾處提法的請示信上的批語（一九五一年六月二一日）」（『建國以來毛澤東文稿』第二册、中央文獻出版社、一九八八年、三六七頁）。

（44）胡華は當時、中國人民大學の前身である華北大學政治理論部中共黨史組組長、いわば學術面での黨史研究の第一人者であり、この著作は中共中央宣傳部の陸定一、胡喬木らの審閲を經て出版された（胡華「關於擴展中國革命史、中共黨史的研究領域和教學內容問題」『胡華文集』中國人民大學出版社、一九八八年、戴知賢「胡華」『中共黨史人物傳』第六一卷、中央文獻出版社、一九九七年）。

（45）この説は、中國現代史研究委員會（張聞天）編『中國現代革命運動史』（一九三八年刊）の説を、そのまま採用したものである。胡華は、『中國現代革命運動史』の讀者であった（前掲張聞天『中國現代革命運動史』所收の胡華「讀張聞天編著的『中國現代革命運動史』」）。

（46）王眞「關於中國共產黨第二次全國代表大會的會期會址問題」（『黨史資料』一九五三年第二期）。『黨史資料』は、一九五一年の「黨史資料收集に關する通知」に基づき、中共中央宣傳部黨史資料室編纂の黨內刊行物として、一九五三年六月に創刊（一九五二年に不定期刊として試辦）された月刊誌で、一九五五年まで全二十期が發行された。

（47）著者の裴桐については、註（11）參照。

（48）王論文が擧げる根據のうち、『中國現代革命運動史』と『中國の赤い星』は、『三十年』初版以前からその存在がよく知られていたものである。『三十年』初版はそれらの説をあえて採らずに「五月杭州西湖」としていたのだから、その訂正のほぼ唯一の決め手は李達の回想だったと言ってよかろう。

（49）五一年のものは、「中國共產黨成立時的回憶」（『黨史資料』第一輯、一九五二年、執筆は一九五一年六月）、「上海市委劉曉あての書簡」（前掲陳沛存「有關中共二大會址的門牌問題」所引）、五二、三年のものは、前掲王眞「關於中國共產黨第二次全國代表大會的會期會址問題」の引用するもの、五四年のものは「回憶老漁陽里二號和黨的〝一大〟、〝二大〟（一九五四年二月二三日）」（『黨史資料叢刊』一九八〇年第一輯）、五五年のものは「中國共產黨的發起和第一次、第二次代表大會經過的回憶（一九五五年八月二日）」（「二大」和「三大」――中國共產黨第二、三次代表大會資料選編』中國社會科學出版社、一九八五年）。

（50）「李達の中央檔案館あての書簡（一九五九年九月）」（『李達文集』第四卷、人民出版社、一九八八年）。

（51）劉立凱・王眞『一九一九至一九二七年的中國工人運動』（工人出版社、一九五三年一〇月）三二頁、同修訂本（工人出版社、一九五七年八月）二九頁。

（52）前掲蘇曉「中國共產黨早期歷史檔案保存及公布情況概述」。

（53）中共中央組織部・中共中央黨史研究室・中央檔案館編『中國共產黨組織史資料』第一卷（中共黨史出版社、二〇

○○年）二○頁などに、典據としてタイトルのみが記されている中共六大「中共歴次大會代表和黨員數量增加及其成份比例表」がそれに當たる。

（54）趙朴「中國共產黨組織史資料（一）」（『黨史研究』一九八一年第二期）、前掲徐世華「關於中共「二大」代表和中央委員名單的考證」。

（55）中共六大の代表で、二大に出席した可能性がある者としては、張國燾、蔡和森、羅章龍、項英、鄧中夏、何叔衡らが擧げられる。

（56）ちなみに、六大時の統計表は、中共一大については、代表十一人としながら、十人の名前が擧げられているのみで、現在、一大代表と確認されている何叔衡、鄧恩銘、陳潭秋の名前が擧がっていない。また、一部の黨史著述に散見する一大當時の全黨員數五七人という數字は、この六大時の統計に淵源するものである（一大時の記錄では、五三人）。

（57）二大の代表者數二十名という數字は、恐らくは前述のカラチェフ「中國共產黨小史」（註（9）（35）參照）の說（二十人餘りが出席）に出るものだろう。

（58）胡華『中國新民主主義革命史（初稿）』修訂本（一九五二年一二月北京十一版）の「修訂十一版後記（一九五二年八月二五日）」。

（59）李雲龍・馬紅「六大決議案版本研究」（『黨的文獻』一九八八年第一期）。

（60）前掲李達「中國共產黨的發起和第一次、第二次代表大會經過的回憶（一九五五年八月二日）」。

（61）前掲張國燾『我的回憶』第一册、二三七頁（Chang Kuo-t'ao, *The Rise of the Chinese Communist Party, the Autobiography of Chang Kuo-t'ao*, Vol.1, Lawrence, 1971, p.247）。

（62）張國燾が胡華のものをはじめとして、五○年代初めの中國國內の革命史著作を參考にしていたことは、張自らが認めている（Chang, *op. cit.*, p.700, n.11）

（63）邵維正「中國共產黨第一次全國代表大會召開日期和出席人數的考證」（『中國社會科學』一九八○年第一期）、邵維正・徐世華「〝二大〟的召開和民主革命綱領的制定」（『黨史研究』一九八○年第五期）。

（64）この數字は、一九二二年六月三○日附の陳獨秀のコミンテルンあて報告（『中共中央文件選集』第一册、四七頁）に見える當時の黨員數である。

（65）徐世華「關於中共「二大」代表和中央委員名單的考證」（『歷史研究』一九八一年第二期）。

（66）前掲「李達の中央檔案館あての書簡（一九五九年九月）」。ただし、李達は、出席したはずの人物として、陳獨秀、張國燾、蔡和森、李達を、そして出席しなかったはずの人物として、譚平山、楊明齋、毛澤東を擧げている。

（67）前掲『蔡和森的十二篇文章』二五～二六、三八頁、前掲『中共黨史報告選編』二九、四三頁。

（68）中共中央黨史研究室『光輝歴程――從一大到十五大』（中共黨史出版社、一九九八年）四七頁、中共中央組織部・中共中央黨史研究室・中央檔案館編『中國共產黨組織史資料』第一卷（中共黨史出版社、二○○○年）一九～二

○頁、中共中央黨史研究室『中國共産黨歴史』第一巻（中共黨史出版社、二〇〇二年）九九頁。

（69）「關於我們黨的組織問題（補充報告）」（一九二二年冬）という題名（露文からの翻譯とする）で、前掲『「二大」和「三大」』一二八～一二九頁に收められているものである。また、英文版は、「アルヒーフ」に收藏されている（ф.514, оп.1, д.16, л.28-29）。この文書は、コミンテルン第四回大會（一九二二年一一～一二月）に參加した中共代表團（團長は陳獨秀）が、コミンテルンに提出した報告と見て間違いない。

（70）E. Snow, *Red Star over China*, 1st revised & enlarged ed., New York, 1968, p.158（松岡洋子譯『中國の赤い星（增補決定版）』筑摩書房、一九七五年、一〇九頁）。なお、文革以前に中國國內で刊行された毛澤東傳は、毛が不注意によって二大に出席できなかったことを意圖的に記さないことが多かった。

（71）例えば、羅章龍、譚平山、施存統は、いずれも人民共和國成立以後に、中共創立期にかんする何らかの回想錄を殘しているが、そこには自身が中共二大に出席したという記述はない。

（72）王志明「關於出席中共「二大」的代表名單問題的探討」（中共一大會址紀念館・上海革命歴史博物館籌備處共編『上海革命史資料與研究』第二輯、上海三聯書店、二〇〇二年）。

（73）英文版「わが黨の組織問題について（補充報告）」（一九二二年一二月九日）――註（69）參照。

on the just and reasonable procedures. In this manner, the Autumn Assizes can be understood as having played the important function of supporting the legal system of the imperial government in terms of legal judgments and judicial procedures.

While introducing documents from the Board of Punishments 刑部, the central judicial organ of the state, this study also analyses the workings of its deliberations in detail. In other words, when the officials of the Board of Punishments issued their rulings in the Autumn Assizes, they first educed things from various cases that would serve as a guide for their decisions. These would then be compared in the light of one another and the seriousness of the crime weighed, leading to of the opinion of each member. This way of arriving at decisions however caused great confusion when seeking a consensus on a final ruling, particularly when there were in one case grounds for both increasing and decreasing punishment. This became a major cause of the instability that shook the decision-making of the Autumn Assizes. Nevertheless, this provided a consistent flexibility in the decisions of the Autumn Assizes, and it is thought that it functioned as an effective means of discovering the most just decision in a variety of cases.

## ON THE SECOND CONGRESS OF THE CHINESE COMMUNIST PARTY

ISHIKAWA Yoshihiro

The Second Congress of the Chinese Communist Party (CCP), which was held in Shanghai in July of 1922, differed greatly from the First Congress in that it produced official documents such as an unambiguous party constitution and party resolutions, which had not been transmitted from the previous meeting. The documents related to the Second Congress, such as the Manifesto of the Congress, occupy an important place not only in the history of the CCP but also contemporary China as the incipient movement toward the later theoretical position of joint struggle, the decision on the anti-warlord movement, anti-imperialism that comprised the active policy of the Democratic United Front are found within them. Nevertheless, there are many issues that have yet to be addressed regarding the process of creation and transmission of the documents adopted by the Second Congress and many points concerning the holding the Congress itself (including when, where, by how many and by what sort of representatives) remain unclear.

This study first clarifies the provenance of the literature on the Second Con-

gress and presents the newly discovered fact that the Manifesto of the Second Party Congress, which has heretofore been given great weight, was not actually produced or made public during the Second Congress. Subsequently, this study re-examines just how and on basis of which historical sources the history of the Second Congress had been determined. In this process of re-evaluation, it was discovered that there was a tendency to depict the early history of the party in overly fine detail during the period of the People's Republic. At the same time this study reviews the restraints that were imposed on descriptions of the early party congresses. On the basis of this overview, I point out that "the historical truth" of the CCP rests on the authority of statistical resources produced by the Sixth Party Congress in 1928, rather than being based on historically accurate sources of any sort, and that this was thus party history as political act, one which mimicked history but was not in fact history. It should be recognized that the identities of the participants in the Second Congress is a problem that cannot be solved unequivocally. At the present time, we can do no more than confirm that there appears to have been a congress, which approximately seven people, including Chen Duxiu 陳獨秀, Zhang Guotao 張國燾, Cai Hesen 蔡和森, and Li Da 李達, attended.

## UIGUR PEASANTS AND BUDDHIST MONASTERIES DURING THE MONGOL PERIOD: RE-EXAMINATION OF THE UIGUR DOCUMENT U 5330 (USp 77)

MATSUI Dai

The Uigur document housed in the Berlin-Brandenburg Academy of Science, U 5330, was first published as No.77 in *Uigurische Sprachdenkmäler* by W.W. Radloff and has been referred by many scholars. However its contents have not yet been clarified. The author of this paper presents the fully revised edition of the document, and proves that the document is an alliance covenant of Uigur peasants against a possible conflict with a Buddhist monastery.

Furthermore, the author reconstructs the historical background of the document U 5330, based on a comparison with other Uigur and Mongol texts. The author points out the following: (1) Uigur Buddhist monasteries in Turfan were bestowed with the priviledge of tax exemption throughout the West Uigur period (9th-12th cc.) and the Mongol period (13th-14th cc.); (2) However, during the